

2001年11月18日

傷ついた葦を折ることなく

【聖書】イザヤ42章1～4節

42:1 見よ、わたしの僕、わたしが支える者を。わたしが選び、喜び迎える者を。彼の上にわたしの霊は置かれ、彼は国々の裁きを導き出す。42:2 彼は叫ばず、呼ばわらず、声を巷に響かせない。42:3 傷ついた葦を折ることなく、暗くなってゆく灯心を消すことなく、裁きを導き出して、確かなものとする。42:4 暗くなることも、傷つき果てることもない、この地に裁きを置くときまでは。島々は彼の教えを待ち望む。

【序】イスラームの信仰とキリスト教の信仰

現在イスラーム教徒は世界の人口の1/5、やがて1/3になると言われています。キリスト教徒は世界の人口の1/3ですからやがて同数になり、逆転するかもしれません。イスラーム教徒と共に生き、共に栄えていくことに真剣に取り組まなければならない時になっていると思います。その手始めとしてイスラームの教師から話を伺う機会を持つことにしました。何を聞いたらいいかお互いの考えをまとめる意味で、今日この礼拝後に私たちの間で話し合いをいたします。皆さんお残りください。

私もポツポツ本を読み始めました。そして先週は622年にマジーナで誕生したイスラーム共同体「ウンマ」の理念の特徴をご紹介しました。共同体に属する者は互いに助け合い、保護し合う強い同胞意識で結ばれます。仲間を攻撃する敵は皆で戦わなければならない。仲間の敵を助けてはならないのです。ですからパキスタンばかりでなく、インドネシア、マレーシアをはじめアラブ各国のイスラーム教徒が、アフガンのタリバーンに連帯して反米の叫びを上げているのは、当然のことだと言うことがわかりました。

しかし6000人もの人を殺した犯罪者でも、イスラーム教徒ならば保護し合うべきなのではないでしょうか。聖戦(ジハード)を叫ぶ根拠を知りたいものです。どうして男は髭をはやし、女はブルカを着なければ罰せられるのでしょうか。どうして女は教育や職業を禁じられるのでしょうか。私たちキリスト教徒に対して、どんな違和感を持っているのでしょうか。いろいろ聞きたいことがあります。

パウロは「神の敵であった時でさえ、イエス・キリストの死によって神と和解させていただいた」と言っています。回心以前のパウロはユダヤ教の期待の星、反キリスト教徒の急先鋒でした。彼によって多くのキリスト教徒が殺されました。しかしそのような神の敵であった時でも、神さまは彼を愛して、排除なさらなかった。イエス・キリストを十字架にかけてパウロの罪をも赦し、彼が悔い改める時をお待ちになってくださったのでした。彼がキリスト教徒を殺し回っていた時に、神さまが彼をご自分の敵として打ち滅ぼしておられたら、世界にキリストの福音を確立していった偉大な使徒パウロは誕生しませんでした。十字架に現された神の愛は、このように敵をも我が子にしてしまう懐の広い豊かなものですから、そもそも敵など存在しないのです。ですからヨハネは、イエス・キリストを救い主と信じる信仰こそ、敵・味方に分かれて殺し合うこの世に打ち勝つ勝利の信仰だといったのでした。

しかし現実の世界ではキリスト教徒といわれる人でも、目には目、歯には歯の報復をやめず、戦争が繰り返されています。じつに悲しい限りです。でも聖書の教える信仰は違うのです。としますと、イスラーム教徒についても、クルアーン(コーラン)の教えはこうなのだが、それが現実には守られていないでこうなっていると、同じ様なことが言えるのかも知れません。もしそうならキリスト教徒もイスラーム教徒も互いに聖典に帰ろうと、悔い改めの運動を進めることが、何よりも大事だと言うこととなります。とにかく互いに理解し合うことから始めなければなりません。

今日は、荒々しいこの世に示されたキリストの愛を見つめ直したいと思います。

[1] ラニエロと灯火

昔、イタリアのフィレンツェに、ラニエロという喧嘩大好きな暴れ者がいました。彼には好きで結婚したフランチェスカという奥さんがいましたが、彼の余りの乱暴さに我慢できなくなって、とうとう実家に逃げ帰ってしまいました。ラニエロはあちこちの戦に参加しては、敵からぶんどった宝物を持ち帰っては、フィレンツェの聖堂のマリア像に捧げました。フランチェスカがそれを聞いて帰って来てくれたらと思ったからです。しかし彼がどんなに手柄を立てて宝物をマリア像に捧げても、彼女は戻って来てはくれませんでした。

ラニエロはとうとう十字軍に参加して、遠いエルサレムにまで戦争に出かけて行って、またも大手柄を立てました。そして今度はキリストの墓の前にもてる灯明から、自分の灯火に火を移す名誉を与えられました。ラニエロはこの灯火をフィレンツェの町に持ち帰る決心をしました。フランチェスカに見せたかったのです。でも灯火は、風の一吹きでふっと消えてしまいます。旅の途中で消さないように、よほど注意して持ち帰らなければなりません。

彼は馬の上に後ろ向きにまたがりました。前からの風に当たらないようにするためです。旅の途中で強盗に襲われましたが、それまでのように暴れ回ってやっつけることが出来ません。そんなことをしている間に、灯火が消えてしまうかもしれないからです。彼はじつと我慢して、されるままになりました。そして持ち物をみなはぎ取られてしまいました。彼は食べ物をめぐんでもらいながら、旅を続けました。

ボロの身なりでやせ馬に後ろ向きにまたがり、背中をまるめて灯火を大切に抱えて進む姿を見て、人々は馬鹿にしてからかいました。そんな恥をかかされたら、以前のラニエロなら怒り狂って相手を叩きのめしたことでしょう。でも灯火をまもるために、ただただ我慢しなければなりません。こうしてラニエロはやっとフィレンツェに帰ってきました。

ところが人々は、その灯火が本当にエルサレムのキリストの墓から運んで来たものか、証拠を見せろというのです。彼は途方に暮れてしまいました。するとその時、一羽の鳥が聖堂の中に飛んできて灯火にぶつかりました。その衝撃で灯火はぱっと消えてしまいました。ラニエロはアッと息をのみました。人々はどっと笑いました。ところが、消えた灯火がその鳥に燃え移り、その火でマリア像

のローソクに火がともったのです。鳥は床に落ちて息が絶えました。笑った人人の心に感動が起きました。「何と不思議な鳥だろう。私たちはこの灯火が確かにキリストさまのお墓からのものだと信じる」。鳥は命を投げ出して、あかしを立ててくれたのでした。

消えやすい灯火を守るために、ラニエロは大変な苦勞をたくさん味わいました。ところがそのつらい長旅が、ラニエロを全く別人に変えてくれたのでした。彼はフランチェスカがどうして自分のもとを去ってしまったのか、またどんなに手柄を立てても戻ってきてくれなかったかも分かりました。彼はフランチェスカの家に行って、優しく穏やかになった自分を見てもらいました。彼女が喜んで彼の元に戻ってきてくれたことは言うまでもありません。そして二人はとても幸せに暮したそうです。

[2] 葦を折ることなく

これはラーゲルレーブのキリスト伝説集のなかにあるお話です。暴れ者のラニエロを優しく穏やかな夫に変えた灯火はイエス・キリストを表わしているのです。イエス・キリストはベツレヘムという小さな田舎町の飼葉桶の中に寝かされている貧しく弱々しい乳飲み子というお姿で、この世に來られました。ヘロデ王が、自分の王座が危うくなるのを恐れて、ベツレヘムとその一帯の2才以下の男の子を皆殺しにしました。その時には、夢に現れた天使のお告げを信じたヨセフが、すばやくエジプトに逃げる決断をしたので守られました。神さまがこの世を救うために送ってくださったイエス・キリストは、このように風の一吹きでフツと消えてしまうような心もとなさそのものに見えました。

またイエス・キリストのご生涯の最後は、十字架の上の死でした。武装した大勢の兵隊がゲッセマネの園で祈っているイエス・キリストに襲いかかりました。ペトロが剣を振るって戦おうとしましたら、「剣をさやに納めなさい。剣をとる者は皆剣で滅びる」とおっしゃって、自分から進んで捕らえられていきました。十字架につけられて「自分を救え、自分を救え」と罵られました。でも彼らの赦しを祈りつつ「父よ、わたしの霊を御手に委ねます」と死んでいかれました。人々のためには奇跡の数々をなさりながら、自分を守ることは一切なさらず、貧しく弱々しいお姿で一貫しておられました。これが全世界の罪を贖う救い主だったのでした。

今日の聖句をご覧ください。キリスト誕生700年前のイザヤの預言です。

「傷ついた葦を折ることなく、暗くなっていく灯心を消すことなく、
裁きを導き出して、確かなものとする。

暗くなることも、傷つき果てることもない。」（42:3～4）

葦とはすぐに折れてしまう茎のもろい植物です。傷ついた葦というのはですから、ちょっと触っただけでもダメになってしまう脆い状態をいうのでしょ。暗くなっていく灯とは、まさに燃え尽きようとしているローソクの状態です。ちょっとした空気の動きでも消えてしまう弱々しい有様をいうのでしょ。「裁きを導き出す」とは「正義を貫いていく」と言い換えてもよいでしょう。非常に脆く弱々しい者を決してそこなうことなしに正義を貫いていく——私はこの言葉に初めて触れた時、大きなショックを受けました。

ご存知のように私は、日本の軍国主義教育を受けて育ちました。敵の不義を打ち破り、正義を打ち立てていかなければならない、勝つために強い兵隊になれと、厳しい鍛錬を受けました。戦争で320万人以上の日本人が命を失いましたが、正義の実現のためにはやむ得ない犠牲だと思いました。ところが日本の正義を貫くために、日本軍が殺した人々が2000万人以上もいたということ、戦争に負けた後で知ったのでした。

戦争による破壊と混乱の中で、私は生きる意義を求めてさまよい、聖書を手にするようになり、イエス・キリストと出会いました。この救い主の生涯は馬小屋に始まり、十字架で終わっています。弱々しい貧しさで一貫しています。でもそこにこそ「傷ついた葦を折ることなく、暗くなっていく灯心を消すことなく、裁きを導き出して、確かなものとする」という預言通りの救い主の姿があったのでした。正義とは敵を殺していく恐ろしいものだと思っていました。しかしイエス・キリストは弱い者、脆い者を決してそこなうことなく、大切にしながら、正義を貫いていかれました。このお方こそ本当の救い主だと私は素直に納得できました。

[結] 優しく穏やかな平和を造りだすキリスト

強い人間を優しく穏やかな人間に変えるにはどうしたらよいでしょうか。妻の優しい愛が必要だといわれます。でもフランチェスカは実家に逃げ帰ってしまいました。ところが神さまは、ふっと消えてしまう心もとない灯火を、ラニエロの手に持たせて長い旅をさせることによって、手におえない暴れ者を優しく心の低い人間へと造り変えてしまわれました。ユダヤ教の熱狂的信徒、キリスト教徒迫害の旗手だったパウロの目を開かせたのも、十字架の死をとげられたイエス・キリストが彼の前に現れてくださったからでした。

力づくでは人を救えないのですね。正義も平和も力づくでは決してもたらされないのですね。馬小屋の飼葉桶から十字架までの生涯をたどられたイエス・キリスト、最も弱い者・最も貧しい者に身を寄せ、一緒に生きてくださり、敵の救いのためにも命を投げ出してくださった謙遜な愛だけが、この世界に優しく穏やかな平和を造りだしていくのです。

皆さん、イエス・キリストを救い主とお信じください。信じるとは、このお方こそ自分を変え、世界を変えて下さるお方だとして、自分をそっくりそのお方の手に委ねることです。

ラニエロは灯火を手の中にかかえて旅を続けました。彼と灯火は一体になりました。そして彼と一体になった灯火が彼を優しい穏やかな人に変えてくれたのです。灯火を持って旅を続けなければ、ラニエロは変わらなかったのです。

私達もイエス・キリストと一つに結ばれなければ、大きく変わりません。信じるとは我と我が身をどうぞ宜しくとすっかり委ねることです。信じてバプテスマを受ける時、聖霊が私たちに注がれます。聖霊が私達をイエス・キリストと結びつけて、一体にしてくださいませ。

イエス・キリストをあのように歩ませた命が、私たちに与えられます。私たちの中にイエス・キリストの命が働き始め、私たちは変えられていきます。そしてイエス・キリストに似ていく自分になっていきます。何と嬉しいことでしょう。

ラニエロのように灯火を大切に抱えて、人生の旅を続けましょう。イエス・キリストを信じ、イエス・キリストと一つになって人生を送っていきましょう。